フローベールの逸話——または作家と結婚

(上)

三　浦　淳

(1)

三島由紀夫は1958年（昭和33年）6月1日，杉山瑤子と見合い結婚した。[1] これについて，三島自身は『私の見合結婚』という文章を残している。

> 恋愛するならすればいいし，文士は独身の期間が永いはうがいい，僕自身の結婚の時期は，四十歳になつたら，と考へてゐた。ところが三十代に入つた三年前から，なんだかだんだん心細くなつてきて，結婚といふことを真剣に考へるやうになつた。いよいよ中年に向はうとする三十男の気持としては，当り前の話ではある。だから，さきをととしの「小説家の休暇」といふ書き下しの中で，僕は，「いづれ私も結婚するだらう」と書いた。これが，自分の結婚について文字に現した最初だつた。[2]

そして恋愛と見合いとどちらがよいかを考えた末，自分なりの条件にかなった相手を見つけるには見合いの方が適切と結論づけて，相手を探し，画家杉山寧の長女瑤子と出会ってわずか2ヶ月後に挙式というスピーディな家庭づくりをやってのけるのである。ちなみに『小説家の休暇』での「結婚宣言」とは次の通りである。

> このごろ外界が私を脅やかさないことは，おどろくべきほどである。(…) さうかと云つて，私の内面生活が決して豊かだといふのではない。内面の悲劇などといふものは，あんまり私とは縁がなくなつた。(…)
>
> (…) 大体において，私は少年時代に夢みたことをみんなやつてしまつた。少年時代の空想を，何ものかの恵みと劫罰とによつて，全部成就してしまつた。唯一つ，英雄たらんと夢みたことを除いて。
>
> ほかに人生に何があるか。やがて私も結婚するだらう。青臭い言ひ方だが，私

が本心から「独創性」という化物に食傷するそのときに。(3)

さて，三島由紀夫には結婚前後の毎日を日記体で綴ったエッセイ『裸体と衣裳』(1959年・昭和34年）があるが，その「〔1958年〕五月九日」の項には次のように記されている。

> 杉山家と結納をとり交はす。
> 「結婚」といふ観念が徐々に私の脳裡に熟して来たのは，一昨々年ころからのことと思はれる。それまで私は小説家たることと結婚生活との真向からの矛盾をしか見なかつたが，私も年をとり，矛盾をすこし高所から客観視するやうになつたのである。この世の慣習や道徳に与し，その中に一応生活して，すべての慣習や道徳を疑つてかかる仕事をつづけてゆくのは，ずいぶん明白な論理的矛盾だが，論理的潔癖というものをむりに支へるには，しやつちよこばつた若さを維持して行かねばならず，却つてこんな努力のはうが仕事を阻害することになりかねない。それに，真に自由になるには，まづ自分を縛つてかからねばならぬといふ人生上の智恵を，私はおそらく人より永い年月をかけて，徐々に学ぶにいたつてゐた。遊泳者が全身を脱力して，のびやかに浮身をするやうに，私は矛盾の海水の上に，浮身をする術を覚えるべきだとさとつた。(…)
> 私は又，晩年のフロオベエルが公園を散策しながら，乳母車を押してゆく家族づれを見て，「私もああいふ生涯を送ることもできたのだ」と述懐したといふ挿話をもよくおぼえてゐた。(4)

誰でも結婚をする時にはその意味を多少なりとも考えずにはいられないものだ。まして本業と世俗的に生きること（結婚もその一つ）との関係を真摯に考えざるを得ない作家であれば，この点について一度は真正面からおのれに問いたださないわけにはいかない。三島のこの文章はその辺の事情を巧みに表現している。

そこで，結婚との関連で「フロオベエルの挿話」を引用している点に注目したい。三島が杉山瑤子と見合い結婚するにあたってわざわざフローベールの言葉を引用したのは偶然とは思われない。一生独身を通し小説の芸術的完成に傾注したフランス作家の逸話は，およそ文学や芸術に従事する人間にとって少なからぬ重みを持っているはずだからである。

ただし，ここでの三島の引用はオリジナルからかなりずれている。この逸話

はフローベールが可愛がっていた姪カロリーヌ・コマンヴィルの証言に由来しているが，有名な話というのはうろ覚えで引用される度に少しずつ形を変えてしまうものであるから，念のためここでオリジナルを掲げておこう。

> 伯父について語ったほどの人なら誰しも認めるところでありますが，実にその生活は知能の目覚めから死に至るまで唯一つの熱情，「文学」の長い発展でありました。伯父はその為一切を犠牲にしました。恋といい愛といえども芸術から伯父を外らすことはできませんでした。その晩年に果して伯父は常道をとらなかったことに後悔の念を抱いていたでありましょうか。或る日セーヌの河畔を一緒に帰って来た折りのこと，ふとその唇から漏れた感慨深げな二言三言の言葉は，はしなくもそれを思わせるものがあるように考えられます。訪ねて行った私の友人がその時，丁度愛くるしい子供達に取りまかれているところでした。「あの人たちは真実の中にいる」と伯父は，正直善良な家庭内の様子をそれとはなしにそう言って私に聞かせました。「そうだ」，伯父は重々しい口調でそう独言を言いました。私は伯父の思惑が分からずにそのそばに黙っておりました。これは私どもの最後の散歩となりました。(5)

ところで結婚を前にしてフローベールを引用した三島がトーマス・マンを好んでいたことは，周知の事実である。その芸術家小説『トーニオ・クレーガー』について，三島は『芸術にエロスは必要か』など幾度か言及しているが，ここではその点に深入りはせず，三島がマンとフローベールの類似性を指摘していることを思い出しておくにとどめたい。三島は上でも引用したエッセイ『小説家の休暇』の中で次のように述べている。

> しかし純然たる芸術的問題も，純然たる人生的問題も，共に小説固有の問題ではないと，このごろの私には思はれる。小説固有の問題とは，芸術対人生，芸術家対生，の問題である。今世紀にあつて，トオマス・マンが代表的作家であるゆゑんは，この問題をとことんまで追究したからだ。プルウストもさうである。
>
> 十九世紀の作家では，バルザックもスタンダールも，この問題を背後に隠しながらも，それを小説の霊感の源泉とした。ひとりフロオベルがこの問題性をするどく意識した。(6)

三島自身が「結婚宣言」をした書であるとする『小説家の休暇』の中で，こうした言及をしているのは興味深い。「芸術対人生，芸術家対生」の問題とは，

そのまま作家にとって結婚とは何かという問題につながるはずだからである。三島が結婚問題とマンやフローベールをすぐ結びつけたとは言うまい。ただ，この頃三島が考えていた問題領域の中に結婚と「芸術家対生」とが含まれていて両者にはつながりがあったこと，この場合の「芸術家」としてはマンとフローベールがすぐ思い浮かんだことを確認しておけば，それで十分であろう。

(2)

結婚した時，三島由紀夫は33歳であった。相手の杉山瑤子は21歳で日本女子大在学中だったから，かなり年齢差のあるカップルと言えよう。三島は結婚相手の条件について，『私の見合結婚』の中でこう述べている。

> 結婚適齢期で，文学なんかにはちつとも興味をもたず，家事が好きで，両親を大切に思つてくれる素直なやさしい女らしい人，ハイヒールをはいても僕より背が低く，僕の好みの丸顔で可愛らしいお嬢さん。僕の仕事に決して立ち入ることなしに，家庭をキチンとして，そのことで間接に僕を支へてくれる人(7)

そして婚約すると，

> 瑤子は，かつて僕の小説を読んだことがないし，今もつて読まない。学校はやめた。可哀さうだと思つたが，特別に研究してゐるものがあつたわけでもないからと，至極朗らかだ。(8)

というわけで，瑤子は大学を中退して三島夫人となる。

ちなみに三島は結婚の８年後に『夜会服』というエンターテインメント小説を書いているが，そこでもヒロイン稲垣絢子は大学在学中に見合いをして，卒業せずに結婚してしまう。

ところで，三島が好んだトーマス・マンは，この点で奇妙に類似した結婚をしている。マンが結婚したのは29歳で，相手のカチア・プリングスハイムは21歳。やはり比較的年齢差があるが，二十世紀初頭であるからこれは時代的なものが大きかろう。(9)カチアは父が数学専攻の大学教授という恵まれた環境にあったこともあり，当時の女性としては珍しく大学に通っていたが，結婚が決まっ

て中途でやめている。父の影響からか大学では自然科学を主に学んだという。文学に全然興味がないわけではなく，当時すでに高い評価を得ていたマンの『ブッデンブローク家の人々』は読んでいたというが，少なくとも主たる興味を文学に注ぐようなタイプの女性でなかったことは確かだろう。(10)

トーマス・マンが『トーニオ・クレーガー』を発表したのは1903年１月だった。それから１年後に彼はカチアと知り合い，さらにその１年後に結婚する。この著名な短篇小説の「芸術家対市民」という構図は，マンの結婚から逆に見ると，ボヘミアン時代を終えて市民生活に入るぞという決意を述べた一種の「結婚宣言」であったと考えられる。（この点については拙論「マン兄弟の確執—1903年～05年—」で詳述したのでここでは繰り返さない。(11)）無論マンは見合い結婚をしたわけではないが，「結婚しようという決心がまずあって，しかるのちに愛情が生まれる」という有名な文句を，彼は結婚後20年を経て書いたエッセイ『結婚について』で記している。正確にはこうだ。

> ヘーゲルは，結婚にいたる最も道徳的な道は，まず結婚しようという決心があって，それからこの決心が愛情を生む結果になり，結果として結婚の際に決心と愛情が溶け合うことになる道である，と言っています。私はこれを読んでたいへん喜ばしい思いがしました。というのも私もそうだったからで，疑いもなくこういうケースは非常に多いのです。「妻を求める」という表現は（これは恋愛しているとか婚約しているということではなく，結婚をする気になっているというだけの意味ですが），これを通俗的に表現したものです。(12)

恋愛の結果が結婚だという素朴な見方を打ち砕く人間知とでもいうべきものが，この文章の中にはある。ちなみに三島由紀夫には先に引いた『私の見合結婚』のほかに『見合ひ結婚のすすめ』（1963年）という文章もあって，恋愛と見合いを対立させる思考法の無効性が説かれている。

> 見合ひ結婚は日本の特産物のやうに言はれてゐるが，外国の上流社交界でも，名家の令嬢は，デビュタントとして，少女時代に社交界にお披露目をし，いはばつり合つた縁の若い男女ばかりの生簀に放たれる。
>
> その中を泳がせておけば，どんな相手と恋愛しようと，はじめから上流社交界のリストにのつてゐる相手ばかりで，いはば複数のお見合ひをするも同様である。(…)

私は本当のところ，恋愛結婚も見合ひ結婚も，本質的には大してちがひのないのが現代だと思つてゐる。

それをムリに区別して考へるのは，恋愛がタブーであった徳川時代の常識に，いまだにとらはれてゐるのである。

つまりこの二つは，「禁止を破つた結婚」と「公認された結婚」といふやうな，相対立する概念ではなくなつてゐるのである。

禁止されてゐればこそ，恋愛（不義）の火も燃えさかるので，適当に理性的に恋愛してゐる若い世代は，結婚についても全然理性的で，形だけは恋愛結婚，実質は，見合ひ結婚よりは，はるかに理性結婚に近い，といふやうな例も多いにちがひない。

恋愛といつても，大都会でこそ，偶然の出会ひによる珍妙な一組も成立するが，その大都会でも，多くの恋愛は，職場などの小さな地域社会から生まれる。（…）無限の選択の可能性があるわけではない。みんな要するに，何かの生簀の中を泳いでゐて，同じ生簀の魚と恋してゐるにすぎないのである。

（…）日本独特の見合ひ結婚の利点は，なかじつかな恋愛結婚より，選択の範囲がかへつてひろいといふことである。だれかの口ききで，いろんな職業，いろんな地域の相手とも，見合ひにまで進むことができる。(13)

作家が結婚を考える時どういう発想をするかという点で，三島とマンの類似は面白い。或いは敢えて踏み込んだ表現をすれば，マンが中年期以降「ゲーテのまねび」をしたように，結婚において三島はマンのまねびをしたのだとも言えよう。

80歳の天寿を全うしたマンと，45歳で自決した三島とは無論まるで異なった生き方をしたわけだが，それも，中年期以降に二度の大戦とナチの政権掌握・亡命という激動の時代を生きねばならなかったマンと，20歳で終戦を迎え，以後ぬくぬくとした日常を生きねばならなかった三島の，生活環境の違いに発すると言えなくもない。そして偶然ではあろうが，マン夫人カチアと三島夫人瑤子は，いずれも夫に先立たれてから25年を生きて没している。(14)

(3)

ところで，『トーニオ・クレーガー』で展開されている「市民に憧れる芸術家」というモチーフ，具体的には文学に興味を持たないハンスやインゲに憧れ

る文学少（青）年トーニオという構図と，先に三島が引いていたフローベールの逸話，すなわち終生独身を通し小説という芸術の完成に没頭したフランス文学の巨匠が，子供に囲まれて平凡に暮らす姪の友人を見て「あの人たちは真実の中にいる」と言ったという話とを比較してみると，そこには少なからぬ共通性が感じられるのではなかろうか。

実はトーマス・マンは，このフローベールの逸話に言及した文章を書いている。ただしそれは『トーニオ・クレーガー』を執筆してからずいぶん時を経てからのことであるが，1941年にアメリカでカフカの『城』英訳版が刊行されるに際しての推薦文であり，しかもそこで『トーニオ・クレーガー』にも触れているところが興味深い。やや長くなるが引用してみよう。マンは，カフカのスタイルが夢想的でありながら同時に精確明晰である点で，ノヴァーリスのようなロマン主義者や神秘主義者よりむしろアーダルベルト・シュティフターを思わせるとした上で，次のように述べている。

> この夢想家〔カフカ〕の憧れは神秘の中に咲く「青い花」といったものにではなく，「平凡であることの喜び」に向けられていた。
>
> この表現は，小文の執筆者が若い頃書いた『トーニオ・クレーガー』に由来する。カフカは，同郷の友人であり彼の作品の刊行者にして註釈者であったマックス・ブロートによれば，この小説にことのほか共鳴を覚えていたようで，その市民的・芸術家的な感情世界を，それとは全く異なった生い立ちであるにもかかわらず，東方ユダヤ的な人間性の立場からきわめて正確に理解していた。『城』のような作品を生み出す「努力と労苦」，この作品の根底にある悲喜劇的なパトスについては，次のように言うことができよう。これは，素朴で人間的な感情を抱くが故に自らの市民的良心にやましさを覚え「金髪で平凡な人々」への愛に悩むトーニオ・クレーガーの芸術家特有の孤独と苦悩を，宗教的なものに移調し高めたものだ，と。この作家の本質を最も適切に名づけるとすれば，宗教的なユーモリストと言うべきかも知れない。
>
> (…) ブロートの語っているところでは，カフカはギュスターヴ・フローベール最晩年の逸話にずっと深い感銘を覚えていたという。狂的とも言うべき禁欲をもって全人生を「文学」という虚無的な偶像に捧げたこの偉大な芸術至上主義者は，姪の〔カロリーヌ・〕コマンヴィル夫人と親しい或る家族を彼女と二人で訪問した。可愛らしい子供たちに囲まれた実直で幸せな家庭であった。訪問を終えて帰途についた時，『聖アントワーヌの誘惑』の著者はひどく物思いにふけり感慨深げであった。コマンヴィル夫人とセーヌ河畔を歩きながら，先ほど垣間見た，

自然で誠実で健康で明るく実直な生の一こまを思い返していた。「あの人たちは真実の中にいる！」彼は何度もそう繰り返した。創作に打ち込む余り禁欲的になって，生を否定し，それこそが芸術家たるものの義務だとしてきた巨匠の口から漏れた，告白とも言うべきこの言葉――これがフランツ・カフカの好んで引いた話だったのである。(15)

カフカがフローベールの逸話を好んだというのは，マックス・ブロートの『フランツ・カフカ伝』に記されている話である。(16)しかしブロートは，同一箇所でカフカの『トーニオ・クレーガー』愛好について触れているわけではない。この点について言及があるのはそれとは別の，カフカがマイリンクを好まなかったと述べている部分で，ブロートはそこに註を付けこう記している。

彼はヴェーデキント，オスカー・ワイルド，ハインリヒ・マンも好まなかった。しかしトーマス・マンの『トーニオ・クレーガー』を好んでいて，『ノイエ・ルントシャウ』誌に載るこの作家のどんな作品をも見逃さないようにしていた。(17)

実際，カフカはブロート宛ての書簡で『トーニオ・クレーガー』に触れている。1904年（したがってこの短篇が発表された翌年）の手紙に以下のような記述がある。

『トーニオ・クレーガー』の新しさはこうした対立〔市民対芸術家，生対精神といった対立〕の発見にあるのではなく（ありがたいことに，僕はもうこうした対立を信じる必要はない，この対立は人をおびえさせる），対立に対する独特の有益さをもった愛着にあるのだ。(18)

またカフカは1917年10月のブロート宛て書簡でもこう述べている。

僕はそうしたことでよく考え込んできた，最近では『ノイエ・ルントシャウ』誌でマンのパレストリーナ論を読んだ後で。マンは僕がその書いたものを渇望する人たちの一人だ。(19)

さて，マンの『城』推薦文はブロートの書に依拠した部分が少なからずあるようだが，カフカの『トーニオ・クレーガー』愛好とフローベールの逸話を好

んだ話とを結びつけたのはマン自身である。とすると，カフカにこと寄せて自作とフローベールの逸話を並べたトーマス・マンは，おのれの芸術家小説とフランスの巨匠との精神的類似性を，少なくとも第二次大戦頃には自ら認めていたことになろう。

ところでマンはブロートのカフカ伝を，『城』推薦文を書く数年前にすでに読んでいる。彼の日記の1937年11月14日の項に，「ブロートのカフカ伝に取り組む。重要」とあり，翌日の日記には，「ブロートのカフカ伝はとても面白い」と書かれている。11月20日にも「ブロートのカフカ伝を読み続ける」と記されている。ブロートの『フランツ・カフカ伝　Franz Kafka. Eine Biographie』は1937年にプラハで出版されているから，マンは出たばかりの本を読んだわけで，彼のカフカへの関心がうかがえよう。

この「とても面白い」というマンの記述は意味深長ではないか。日記にはブロートの本のどの点が面白かったかまでは書かれていない。しかしブロートの本を熟読したらしいマンは，数年後に『城』英訳本推薦のために書いたようなことを，すでにこの時点で考えていたと見ていいだろう。

トーマス・マンとカフカが8歳違いの同時代人だということは，今さら言う必要もないほど当り前の事実であるが，両者に直接の接触はなかったとはいえ，カフカの友人ブロートはマンと接触があったし（マンは34年4月25日にブロート宛ての手紙を書いている），またマン家とカフカの双方と親交を持った人物もいた点は記憶にとどめておいてよいのではなかろうか。[20]

ちなみにマンとブロートはこの後も多少の関わりを持った。ナチ時代，チェコを逃れてアメリカで大学教師の職を得たいと願っていたブロートのために，マンは1938年12月30日に長い推薦状を書いている。しかしブロートは結局アメリカで教職につくのを断わり，パレスチナに亡命してテル-アヴィヴの劇場で脚本家の仕事をし，1968年に死去した。彼は1960年に出版した自伝で，自分はトーマス・マンの好意を無にしたが，マンはそれを悪くとらなかったと書いている。[21]

トーマス・マンとカフカの相互評価もそれ自体非常に魅力あるテーマだが，[22]ここでの言及はこの程度にして，本題に戻ることにしよう。

(4)

トーマス・マンが1941年には少なくともフローベールの逸話を意識していたこと，それがブロートのカフカ伝が出た1937年にさかのぼる可能性も多分にあることは以上で分かった。では，『トーニオ・クレーガー』を書いた頃の若いマンもフローベールの逸話を意識していたのだろうか。そうだとなれば話は面白いのだが，結論から言うとこの点は現在の資料では実証できない。可能性がないわけではないが，濃厚だと言うこともできない。以下，この問題に触れておこう。

まず，姪カロリーヌによる逸話はいつ頃から人口に膾炙するようになったのだろうか。そもそもフランスでシャルパンティエ版の『フローベール書簡集』第1巻が刊行されたのは1887年のことで（フローベール没から7年後），この巻に姪カロリーヌ・コマンヴィルの『思い出』が収録されていたのである。同版は1893年に第4巻の刊行をもって完結しているが，ともかく問題の逸話は1887年から世に出たことになる。

ドイツ語訳のフローベール書簡集が出たのは1904年であるが，これだと1903年初めに雑誌に発表された『トーニオ・クレーガー』より後になってしまう。そこで問題は，フランス語版のフローベール書簡集をマンが読んでいたかどうかということになる。

例えばカフカの場合，フランス語でフローベールの書簡を読んでいたと考えられる。マックス・ブロートが学生時代一緒にフローベールの『感情教育』と『聖アントワーヌの誘惑』を原書で読んだと証言しているし，[23]カフカが特にゲーテとフローベールを好んだとも述べている。[24]姪が伝えている逸話についても，ブロートはカフカがこれに心惹かれていたとして核心部分を引用しているが，中のフローベールの漏らした言葉の前後はフランス語で引いている。明らかにカフカとブロートはフローベールの主要作品や書簡をフランス語で読んでいたのである。

トーマス・マンの場合はどうか。

1904年に独訳のフローベール書簡集が出たことは上記の通りで，マンは1906年にここからノートに抜き書きを行っている（ただし例の逸話はない）。しかし，彼がフローベールの書簡に接したのはこの時が最初ではなかったらしい。

1904年8月末に，後に妻となったカチア・プリングスハイム宛て書簡でこう述べているからだ。

> 昔ずっと若かった頃，フローベールの書簡を読み，目立たぬ箇所で目が離せなくなったことがあります。彼が『サランボー』を書いていた時だと思いますが，或る友人に宛てて「我が書物は私に夥しい苦痛を与える〔この部分フランス語〕」と言っているのです。「夥しい苦痛！」すでにその頃から，僕には事の次第が分かりました。爾来この文句を慰めとして何度も繰り返すことなしには何もできなかったのです。(25)

問題は，この発言から，若いトーマス・マンがフランス語版フローベール書簡集をきちんと読んだと言えるかどうかということである。この点は実は研究者によって意見が分かれていて，詳しく紹介するのも研究史的観点からは面白いのだが，紙数を食うし小論の趣旨からはややずれるので，つづめて述べるなら，資料不十分でいずれとも断言はできない，しかしそうでない可能性の方が高いというのが私の見解である。

マン自身はフランス文学の読書体験をどう語っているか，簡単に見ておこう。カチアと結婚する9年前，1896年初めに，20歳のトーマス・マンは友人グラウトフ宛ての書簡で，フランス作家を原文で読んでいるところだと報告している。そこで名が挙がっているのはモーパッサン，ブールジェ，バルザック，メリメ，スタンダール，「偉大な批評家たち」などである。(26)

以後，1896年，97年，98年の現存する書簡（いずれも数は少ない）にフランス作家への言及は見られない。1899年の或る書簡では，『ジンプリツィシムス』誌にモーパッサンの短篇を推薦している。(27)

下って1904年1月，『トーニオ・クレーガー』発表の1年後，或る雑誌からのアンケートでフランスからの影響を問われたマンは，自分の本質は北方的であり影響といえばまずヴァーグナーだとした上で，技術的な面ということに限るなら，影響をこうむったとは言えないが仕事への刺戟を与えてくれたフランス作家は若干存在するとして，フローベールとゴンクール兄弟の名を挙げている。(28)

最晩年の或る書簡でトーマス・マンは，モーパッサンの短篇（複数）とフローベールの『感情教育』だけは若い頃（früh）原語で読んだが，あとはゴンクー

ル兄弟を含め翻訳を利用したと述べている。[29]ゴンクール兄弟を特に挙げているのは，その『ルネ・モープラン』が『ブッデンブローク家の人々』に影響を与えたとマン自身何度か語っているからであるが，それはともかく，この発言をそのまま信用するなら『感情教育』とモーパッサンのいくつかの短篇を除くと若いマンは翻訳でしかフランス文学を読んでいなかったことになる。

以上のマン自身の発言から何が分かるかというと，マンの若い頃の読書体験については現存する資料からは確実な論証はできないということ，そして年をとってからの発言は合理化や忘却が働くので必ずしも信用はできないということである。

後者について言うなら，若い頃ブールジェをマンが原書で読んだことはグラウトフ宛ての書簡から確実なのに，最晩年のマンはその名を挙げていない。1904年のアンケートでもブールジェの名を挙げていないが，恐らく，Klaus Schröter の言うように，当時ブールジェがフランスの右翼団体に加入してドイツ国内では名前を出せる雰囲気になかったためではないか。[30]この種の「配慮」は最晩年まで続いていたと見るべきだろう。

前者について言うなら，『ブッデンブローク家の人々』で一躍有名になる以前の若いマン，特に1900年以前については，資料が著しく制約されているということである。まず当時の日記は本人が焼却してしまっている。書簡も，作家として名を上げる以前であるから残っているものはごく少ない。兄ハインリヒ宛ての書簡にしても，現存する最初のものは1900年10月24日付けであるが，無論それ以前に兄に手紙を書かなかったはずはないので，書いても残っていないのである。同様にハインリヒからトーマスに宛てたこの時代の書簡も残っていない。

日記と書簡に頼れない以上，若いマンに関する最大の資料は彼の残したノートということになるが，ノートに書き残された事柄が当時のマンの全体像を呈示しているという保証はどこにもないのである。私がこの点を特に強調するのは，マンへのフローベールの影響を否認する側の研究者である Lehnert が，その『トーマス・マン研究史　Thomas-Mann-Forschung』で，他の研究者がノートを参照しているかどうかをやかましくチェックしているからだ。ノートは以前はスイスのトーマス・マン・アルヒーフでしか見られなかったが，幸いにして数年前に公刊された。まず「ノート１」は1894年から95年秋にかけて

記入されている。そして「ノート2」になると，すでに『ブッデンブローク家の人々』の構想を立て始めた1897年7月以降の記入になってしまう。つまり，グラウトフ宛ての書簡でフランス作家を読んでいると述べた1896年初頭前後を含め，1895年末から97年半ばまでがノートでは空白期になっているのだ。20歳から22歳になりたての頃までである。その時代にマンが何を読み何を考えていたかは，したがってノートからは分からない。

ところでこの空白期は，兄ハインリヒが反ユダヤ主義的な雑誌『二十世紀』を発行していた時期にあたる。そしてその頃のハインリヒに最も大きな影響を及ぼしたのが，上でも挙げたフランスの作家・批評家ブールジェであった。(31) ブールジェの代表的評論『現代心理論集』は，トーマス・マンも読んでいた可能性が高い。そしてこの評論はかなりの紙数を費やしてフローベールを論じているのである。(32)

そこで最初の，トーマス・マンがカチア宛ての手紙でフローベールの書簡集を読んだと言っている話に戻ろう。私は，マンがフランス語版フローベール書簡集を全部きちんと読んだということはないだろうと思う。もしそうなら，ブールジェと違い名を挙げるのにためらう理由はないのだから，最晩年になっても若い頃フローベールの書簡集を原書で読んだと証言していたはずである。

ではカチアへの手紙でフローベールの書簡を読んだと言っているのはどういうわけか。これは資料がない以上推測になる。多分トーマス・マンは兄ハインリヒからフローベール書簡集の内容を聞いたか，或いは兄から借りて一部分を読んだか，いずれかではなかったろうか。フランス語の達者なハインリヒはかなり原書でフランス文学に親しんでいたから，フランスものに関してはトーマス・マンは誰より兄から情報を得ていただろう。現存していない1900年以前のマン兄弟の往復書簡にフローベールの名が登場していた可能性はかなり高いと私は思う。また，カフカやブロートがフローベールを原書で読んでいたように，当時このフランスの大作家はドイツ語圏でもかなり注目を集めていた。したがって兄以外の文学仲間や評論や新聞雑誌記事などを通してフローベールについて間接的な知識を得ていたことは十分考えられる。そしてそうした間接的な知識の供給源の筆頭と考えられるのがブールジェなのである（ただしブールジェの『現代心理論集』では，フローベールの逸話も，また結婚前のマンがカチアへの手紙で引用したフローベールの言葉も引かれてはいない）。また上記引用の

通り若いマンは友人グラウトフに，ブールジェと並べて「偉大な批評家たち」を読んでいると語っている。この「批評家たち」が具体的に誰であるかは語られていないが，サント-ブーヴが含まれていると見るのは常識的な線だろう。サント-ブーヴとフローベールの親しい関係は言うまでもあるまい。

要するに，若いマンが活動していた環境には，フローベールについて見聞きする機会がおびただしくあったのである。したがって例の逸話も，直接読まなくても間接的に知ることはあったかも知れない。ただ，その時にこの逸話が強烈な印象を残すことはなかったと考えた方がよかろう。もしそうなら，マンは何らかの形で――ブロートのカフカ伝を読む以前に――この逸話について書き残していただろうからである。ただ，フランスものに興味を惹かれていた1890年代半ばから後半にかけては気づかなかったフローベールの問題意識に，マンは『トーニオ・クレーガー』を書いた1902年頃になって自分自身の問題として行き当たったのだとは言えよう。結果としてマンはフローベールの一面を精神において継承したのである。

註

(1)　一部文献は6月11日結婚と記しているが，1日が正しい。誤った記述は，長谷川泉・武田勝彦編『三島由紀夫事典』(明治書院，1976年)，新潮社編『グラフィカ三島由紀夫』(1990年)に見られる。

(2)　新潮社版『三島由紀夫全集』補巻1，192頁。原文は旧字。以下同じ。

(3)　『三島由紀夫全集』第27巻，105頁以下。

といっても，三島は30歳を過ぎるまで結婚を考えたことがまったくなかったわけではない。大学生だった戦時中，M・Kという女性と交際していたが，まだ職にもついていない三島が逡巡しているうちに，結婚を急ぐ彼女は別の男性と結婚した。これについては三島自身『終末感からの出発　昭和二十年の自画像』という文章で簡単に触れているが(『三島由紀夫全集』第27巻，49頁)，この体験が『仮面の告白』執筆を初めとして作家活動に少なからぬ影響を及ぼしていることを，村松剛は強調している。

村松剛『三島由紀夫の世界』(新潮社，1990年)53頁以下。

安藤武『三島由紀夫「日録」』(未知谷，1996年)85頁。

また26歳だった昭和26年，林房雄の最初の夫人が死去した際の通夜の席で，三島は川端康成令嬢との結婚をそれとなく川端夫人に打診したという。

安藤武，前掲書，136頁。

ちなみに，本気になって結婚相手を探し始めてからの見合いの相手には，現皇后・正田美智子も含まれていたという話もある。

猪瀬直樹『ペルソナ　三島由紀夫伝』（文芸春秋，1995年）286頁。

徳岡孝夫『五衰の人　三島由紀夫私記』（文芸春秋，1996年）123頁以下。

(4) 『三島由紀夫全集』第28巻，49頁以下。

(5) 改造社版『フロオベエル全集』（1936年）第7巻，226頁以下。鈴木健郎・秋山晴夫訳。訳文の旧字旧仮名は新字新仮名に直し，漢字の送り仮名などを若干現代風にし，訳文も一部改めた。

(6) 『三島由紀夫全集』第27巻，88頁以下。

(7) 『三島由紀夫全集』補巻1，193頁。

(8) 同上，193頁以下。

(9) ちなみにマンの父母は11年の年齢差があったし，上の妹ユーリアは15歳年上の相手と結婚している。

(10) Katia Mann: Meine ungeschriebenen Memoiren. Fischer TB 1987 (1974[1]) S.11, 20

邦訳『夫トーマス・マンの思い出』（山口知三訳，筑摩書房，1975年）9，23頁。

(11) 拙論「マン兄弟の確執—1903～05年—」，特に「その4」と「その5」（『新潟大学人文科学研究』第87，88輯〔1995年3月，7月〕所収）参照のこと。

(12) Thomas Mann: Gesammelte Werke in 13 Bänden. Frankfurt am Main (S. Fischer) 1974 Bd.X S.201

なおエッセイのタイトルは従来『結婚について Über die Ehe』となっていたが，最新のトーマス・マン・エッセイ集（Thomas Mann: Essays. Frankfurt am Main [S. Fischer] 1993 Bd.2）では『変わりゆく結婚 Die Ehe im Übergang』となっている。

(13) 『三島由紀夫全集』第31巻，158頁以下。類似の発言は三島の『作家と結婚』という文章にも見られる。『三島由紀夫全集』第28巻，368頁以下。

なお，フランスの社会学者・哲学者ピエール・ブルデューも，社会階層的・空間的に近接した者同士が結婚しやすいという事実を指摘している。『ピエール・ブルデュー　超領域の人間学』（加藤晴久・他訳，藤原書店，1990年）75頁以下。

(14) トーマス・マンは1955年8月12日没，カチア夫人は1980年4月25日没，三島由紀夫は1970年11月25日没，瑤子夫人は1995年7月31日没。

(15) Thomas Mann: Gesammelte Werke. Bd.X S.772f.

(16) Max Brod: Über Franz Kafka. Fischer. 1966. S.89（この原書は，『カフカ伝 Franz Kafka. Eine Biographie』以外にも Brod の書いたカフカに関する文章を収録しているので，タイトルが変更になっている。）

邦訳『フランツ・カフカ』(辻・林部・坂本訳，みすず書房，1972年）109頁。ただしここでは拙訳による。

(17) Brod, a.a.O. S.46; 邦訳337頁。

(18) 新潮社版『決定版カフカ全集』(1992年）第9巻（吉田仙太郎訳)，29頁。固有名詞表記一部修正。1904年，ブロート宛て。

Franz Kafka (Herausgegeben von Max Brod): Gesammelte Werke. Breife 1902－1924. S.31

以下，カフカについてはマックス・ブロート編集の全集（Franz Kafka: Gesammelte Werke in Einzelbanden）とそれを底本にした新潮社の『決定版カフカ全集』により巻数とページ数を示す。訳文は原則として新潮社版全集に依拠するが，一部修正した箇所もある。

(19) 同上，202頁。1917年10月12日ブロート宛て。

Ibid. S.181f.

(20) Robert Klopstock (1899－1972) がそうである。次の書を見よ。Thomas Mann: Tagebücher 1937－1939. Frankfurt am Main (S. Fischer) 1980 S.538

(21) Ibid. S.762, 783

(22) マンは1935年4月4日付けの日記に次のように書いている。「引き続きカフカの『変身』を読む。彼の残した作品はここ数十年間のドイツ語散文の中でも最も天才的なものだと言いたい。これと並べて俗っぽく見えないドイツ語を誰が書いているだろうか。」(Mann: Tagebücher 1935－1936. S.72)

35年6月25日の日記には「カフカの『城』を読む。非常に独特な（von hoher Merkwürdigkeit）作品だ」と書いている。7月8日の日記には，「消灯まで，カフカを終わり近くまで読む。彼ほど惹きつけられる作家はめったにいない」と書かれている。

日記の註釈によると，マンは第一次大戦直後に朗読家の Ludwig Hardt によってカフカの作品を教えられたという。(Ibid. S.473) 1930年に或る雑誌のアンケートに答えて，忘れられている重要作家としてカフカの名を挙げ，「彼の作品を私はことのほか好んでおります」と述べて三大長篇を初めとするカフカの作品に注意を喚起している。(Th. Mann: Gesammelte Werke. Bd.XIII S.424)

35年5月6日の日記には「カフカ全集の新しく出た二巻が来た」とある。

トーマス・マンは1940年11月4日付けの Laughlin 宛て書簡で，『アメリカ』の英訳版が出るのは喜ばしいと述べて，「私にとってずいぶん以前から，このボヘミアのユダヤ人が苦痛に満ちた短い生涯に残した作品は，散文芸術の分野で最も魅力的なもののひとつになっています」(Th. Mann: Briefe II. S.167) と書いている。

(23) Max Brod: Über Franz Kafka. S.54; 邦訳61頁。

ただしブロートとカフカが一緒に原語でフローベールを読んだのは1908年になってのことである。Vgl. Ulrich Weisstein: Heinrich Mann und Flaubert. (In: Euphorion 57 [1963] S.139)

(24) Brod, a.a.O. S. S.52; 邦訳58頁。

(25) Th. Mann: Briefe I. S.53f.

(26) Th. Mann: Briefe an Otto Grautoff 1894—1901 und Ida Boy-Ed 1903—1928. Frankfurt am Main (S. Fischer) 1975 S.62, 69f.

(27) 7月29日付け, Korfiz Holm 宛て。
Hans Bürgin／Hans-Otto Mayer (hg.): Die Briefe Thomas Manns. Regesten und Register. Frankfurt am Main (S. Fischer) Bd.1 S.25

(28) Th. Mann: Gesammelte Werke. Bd.X S.838

(29) 1953年12月16日付け, Louis Leibrich 宛て。
Die Briefe Thomas Manns. Regesten und Register. Bd.IV S.264

(30) Klaus Schröter: Thomas Mann. Reinbek bei Hamburg (rororo) 1964 S.44

(31) 拙論「マン兄弟の確執—1903～05年—」第1回(『新潟大学教養部研究紀要』第22集[1991年]所収)参照。

(32) Klaus Schröter は, 若いマンがブールジェの『現代心理論集』で言及されているゴンクール兄弟, ツルゲーネフ, フローベールなどを熱心に読んだと書いている。(K. Schröter, a.a.O. S.64) これは, マン本人の証言からではなく——ブールジェを読んだことは語っているが, そこから具体的にどういう影響を受けたかはマンは語っていない——, 同時期に兄ハインリヒがブールジェから大きな影響をこうむっていること(Schröter にはハインリヒ・マンに関する研究書もある)をふまえての類推であろう。この類推を私は或る程度妥当な線と見たい。或る程度というのは, どれくらい直接フローベールを読んだかは分からないが, 少なくとも兄や評論や雑誌記事などを通して間接的な摂取はしただろうということだ。

Lehnert は Schröter の見解を, 余りにブールジェの影響を過大評価していると批判している(Herbert Lehnert: Thomas-Mann-Forschung. Stuttgart (Metzler) 1969 S.48, 68)。しかし肝腎なのは, ブールジェを通してマンがその背後にあるフランス文学を吸収したということなのである。

なお『二十世紀』誌時代のマン兄弟のことは, 従来一般には余り知られていなかった。最近になって小塩節が『トーマス・マンとドイツの時代』(中公新書, 1992年)で, マン兄弟がこの時代のことを隠そうとしてイタリア滞在の時期を後年ずらして語った旨の記述を行っている(191頁)。二人がこの時期のことを忘れたかったのは事実だろうが,『二十世紀』を単に「極右雑誌」「国粋主義的な右翼誌」と片付けるだけでは問題を単純化し過ぎる。拙論「マン兄弟の確執—1903～05年—」第1回

のII註(8)を見られたい。

(33) トーマス・マンは兄が編集していた雑誌『二十世紀』誌の1896年10月号に，批評と創作の関係を論じた小文を載せている。そこで，批評家というものは単に美を鑑賞する人間なのではなく芸術的な人間なのだと主張して，例としてサント-ブーヴ，ルメートル，ブランデスの名を挙げている。Th. Mann: Gesammelte Werke. Bd.XIII S.521